



写真1



写真2



写真3

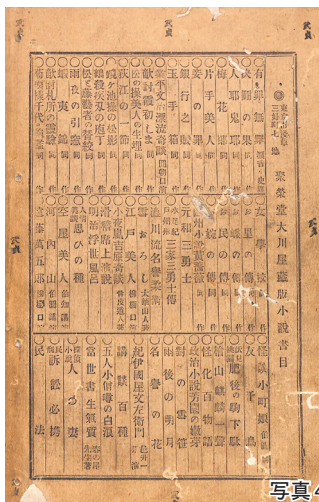


写真4

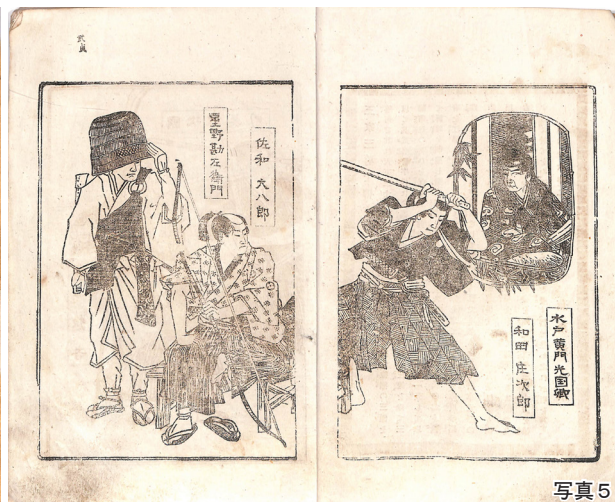


写真5

上段：大阪本の「三家勇士」石川一口口演、丸山平次郎速記、利見新吉復文、名倉昭文館、再版（明治43年） 写真1：表紙・裏表紙、写真2：口絵。  
下段：東京本の「三家勇士」放牛舎桃林講述、加藤由太郎速記、大川屋書店、再版（明治31年） 写真3：表紙、写真4：裏表紙、写真5：口絵。

## 金摺り、銀摺り、豪華！ 大阪の講談本 —吉沢コレクションから—

042

吉沢コレクションは、講談研究者  
吉沢英明氏（埼玉県上尾市在住）が半世紀  
以上をかけて収集した演芸資料のコレク

ションで、その中心である講談本は、質・量ともに他の  
追随を許さない日本一のコレクションと言える。2021  
年大阪公立大学文学研究科では吉沢氏より数万点におよ  
ぶ資料の寄贈を受け、現在も整理を進めている。今回は  
整理に携わってきた立場から、吉沢コレクションの紹介  
をしたい。

講談本とは、江戸時代以来、講釈師が寄席などで口演  
してきた講談を、明治以降に導入された速記術によって  
速記し、活字刊行した本のことである。菊判（縦21.8cm×  
横15.2cm、A5判よりやや大きめ）、200ページ程度、表紙は

木版または石版による版画で、口絵がついている。講談本  
は、「講談小説」と称して、明治三十年代から大正初期  
にかけて大量に発行された。

講談本の発行元は、ほぼ東京か大阪である。吉沢コレ  
クションにおける東京本と大阪本の比率は、7：3、もち  
ろん、コレクションの収集家である吉沢氏が関東在住  
であった影響も大きい、やはり、東京本優勢のように  
思われる。しかし、「実際は、断然大阪が優勢であった」<sup>(1)</sup>  
のである。

講談本の発行元の最大手は、東京の大川屋書店で、明  
治二十年代から大正初期まで講談本を発行し、その量は  
他を圧倒している。東京の発行元としては、文事堂、春  
江堂、日吉堂などが続く。



大阪公立大学・高専基金へのご寄附のお願い

お申込み時に「特定プロジェクトのために：⑨-3」を選択してください。  
（⑨-3：1号館ミュージアム構想のために）

【お問い合わせ】 渉外企画課 TEL: 06-6605-3415  
<https://www.omu.ac.jp/fund/>

編集発行  
大阪公立大学 大学史資料室  
協創研究センター・大学史編纂研究所  
杉本キャンパス学術情報総合センター6階（大学史資料室）  
Tel : 06-6605-3371 E-mail : gr-gakj-archives@omu.ac.jp



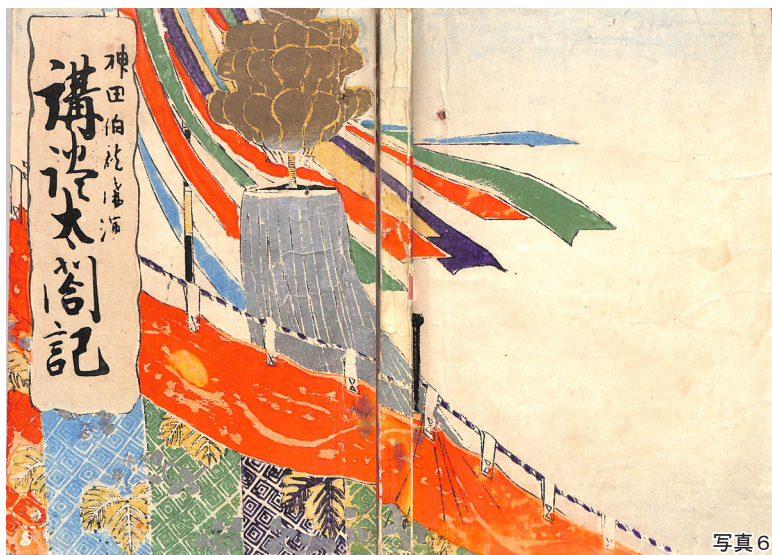


写真6



写真7

「講談太閤記」神田伯龍講演、丸山平次郎速記、柏原圭文堂（大阪）、再版（明治43年） 写真6：表表紙・裏表紙、写真7：口絵。

大阪の発行元は、岡本偉業館、柏原圭文堂、中川玉成堂、博多成象堂、駸々堂などで、心齋橋を中心に活動していた。大川屋書店のような突出した発行元はなく、互いに競争し、時に協同するといった状況で、その結果、講談本の量においては、東京を圧する勢いであった。

東京本と大阪本、それぞれ特徴があり、多くの講談本を見てみると、表紙だけで大体区別がつくようになる。

写真1～5は、同じ『三家三勇士<sup>さんけさんゆうし</sup>』の大阪本（写真1・2）と東京本（写真3～5）である。三家三勇士は、旧水戸藩士和田庄次郎の武勇伝である。前半は、京の三十三軒堂の通し矢において、尾州藩士星野勘右衛門、紀州藩士佐和大八郎と藩の垣根を越えて兄弟の約を結ぶ話で、題名の由来となっている。後半は、庄次郎が、暗殺された国次惣左衛門の娘おみつ、倅惣之助を助けて仇討を成功させる物語である。

大阪本の特徴は、赤・青・緑などの派手な色使いの表紙・裏表紙（写真1）と彩色の折込口絵（写真2）である。所々に銀摺りのあるものも少なくない。また、表紙、背、裏表紙で一幅の絵となっている。写真1・2は、大阪本の特徴をよく表している。表紙の武士の着物の模様、女性の着物の衿、短刀の刃が銀摺りとなっている。多色摺りの口絵は鈴木錦泉画、大阪本の口絵の70～80%は錦泉が描いたと言われている<sup>②</sup>。

それに比べて、東京本は、表紙（写真3）が藍や灰色を基調としたものが多く、口絵（写真5）も見開き墨一色、

裏表紙（写真4）も版元の出版目録と、全体に渋い（あるいは地味）な印象である。特に大川屋書店発行のものにその傾向が大きい。写真2は、典型的な大川屋本である。

『講談太閤記』は、さらに派手な大阪本である。表紙・裏表紙（写真6）は、赤・青・緑・紫の派手な色調、経年劣化であり目立たないが、千成瓢箪は金摺り、吹き流しは銀摺りの豪華版である。銀刷りの入っている本はたくさんあるが、金摺りはこの『講談太閤記』以外見たことがない。『講談太閤記』は、全20冊におよぶ大長編の豊臣秀吉一代記で、全冊にこの豪華な表紙がついている。写真6・7はその第一冊で、藤吉郎の誕生から八重との婚礼までが収められている。口絵（写真7）はこれも鈴木錦泉、あまり目立たないが馬上の信長、藤吉郎の着物の模様に銀摺りが施されている。

このような講談本が並んだ大阪の書店の店頭は賑やかなものだったに違いない。千日前には樋口蚊龍堂という講談本専門の販売店もあった。読者層は一般大衆であり、主に貸本屋を通して広く読まれた<sup>③</sup>。

現代の出版界は、東京一極集中、大阪は地方出版の一つに過ぎない。しかし、明治の講談本の世界では、大阪出版のものが東京を上回っていたのである。

① 脇坂要太郎「大阪出版六十年のあゆみ」大阪出版共同組合 1956年 p.22  
② 山田奈々子「増補改訂木版口絵総覧」文生書院 2016年 p.70  
③ ① p.23  
奥野久美子「100年前？の落書きがある講談本」大阪公立大学 大学史資料室 NEWS LETTER No.12 2024年

（文学研究科 島崎弘子）



## 資料室だより

◆大学史資料室では「大阪公立大学 大学史資料室 NEWS LETTER」を発行しています。大阪公立大学の貴重な学術資料や大学の歴史を紹介します。◆この「NEWS LETTER」は、大阪市立大学「140周年展＋大学史資料館（大学博物館）設立準備 NEWS LETTER」の後継紙であり、「大学の知を発掘！」の番号を引き継いでいます。両紙とも大阪公立大学 大学史資料室のホームページ、図書館ホームページの機関リポジトリで公開しています。

訂正：右段上から3行目「写真2」→「写真3～5」

## 大学史資料室からのお願い

現在、学内にある資料の所蔵調査を行なっています。学術資料そのもの、研究の過程で残された資料類、実験装置や器具類、実習に用いられた教材や作品などを、大学史にかかわる資料とともに探しています。候補となる資料がありましたらご一報ください。

→杉本キャンパス学術情報総合センター 6階 大学史資料室  
Tel：06-6605-3371